

🌙 ナイトセッション

信州の地域福祉のあゆみと 未来へ向けたエール

今年度、「地域福祉コーディネーター総合研修（特別講座）」では、信州の地域福祉に取り組んできた（取り組んでいる）実践者、コーディネーターが、自らの実践を振り返り、記録し、「歴史ものがたり」を紡ぐことに取り組んでいます。

このセッションは、いくつかの地域実践の「ものがたり」を聞きながら、新しい世代とともに、未来に向けた歩みを考えるひと時として開催します。

- ◆ **伊那市における小地域福祉活動の意味付けと、地域福祉コーディネーターの設置に向けた取組みについて**

矢澤 秀樹 氏（信州の地域福祉研究会）

- ◆ **長野市社協の地域福祉の歩み**

土屋ゆかり 氏（信州の地域福祉研究会）

- ◆ **退職後のボランティア・地域活動と「自治会史」づくり**

山岸 征男 氏（前軽井沢町ボランティアセンター運営委員長）

司会 小池 正志 氏（信州の地域福祉研究会）

伊那市における小地域福祉活動の意味付けと、 地域福祉コーディネーターの設置に向けた取組みについて

伊那市社会福祉協議会
地域福祉課 矢澤秀樹

1、伊那市における小地域福祉活動の歴史 【記録】

S40-50年：地区社協の設置（現在13カ所）

旧村部は市各支所を、町部は千世帯を超える区を単位として事務局を設置

H5-8年：地域社協の設置開始（現在120カ所）

ふれあいのまちづくり事業を受託し、小地域福祉活動推進の核として市内の各区に設置呼びかけを行った

H18年：伊那市、高遠町、長谷村合併

H18年：市直営「地域包括支援センター」に職員5名出向

H22年：小地域福祉活動における役割整理

伊那市社会福祉協議会の地域づくりスローガンと住民による地域福祉活動の紐づけをし、ポンチ絵等によりそれぞれの役割整理を行った

H23年：地域福祉推進事業モデル事業開始

「あったかご近所ネット（助け合い活動）」と「あそび場発掘プロジェクト」のモデル事業開始

H23年：社協広報番組「きらきら☆ふくし」放送開始（現在12年-258回放送）

H26年：地域福祉推進事業の追加

3世代交流「にじいろサロン」の事業開始

H26年：「広報・啓発活動 事業計画」の策定（現在第3次広報・啓発活動事業計画）

H27年：地域福祉推進事業の追加

災害時住民支え合いマップの作成、更新に関する補助事業開始

H28年：伊那市福祉相談課との研修人事交流開始（～R3年度まで）

H28年：地域福祉コーディネーター設置（現在7名）

生活支援体制整備事業の受託し、福祉活動専門員の役割を拡大して、地域福祉コーディネーターを増員配置した

H29年：多機関の協働による包括的支援体制構築事業（国モデル事業）の受託

H30年：地域力強化推進事業（国モデル事業）の受託

R3年：地域福祉推進事業の追加

コロナ禍における家庭訪問事業「あいさつ訪問」の事業化

R4年：重層的支援体制整備事業の本格実施

「多機関協働事業（一部）」「地域づくり事業（一部）」「参加支援事業」「アウトリーチ等を通じた継続的支援事業」の受託

2、小地域福祉活動の意味付けとモデル事業の取組み 【記憶】

(1)「で、何をすればいいの？」

新任の地域社協の会長さんから、この言葉を言われた。これからの役員さんに分かりやすく説明できるツールが必要と考え、「市社協、地区社協、地域社協の役割分担図」と、伊那市社会福祉協議会の地域づくりスローガンと小地域福祉活動の紐づけを行った。また、活動をよりわかりやすくするため、「お互い様で地域を耕す本」を作成し、地域づくりの教科書として活用した。

(2)「社協は黒子であり、主役は住民なので社協は表に出なくても良い」

ある先輩からこの言葉を言われた。その通りと思いつつも、舞台における黒子は、その姿や役割が観客にしっかり認識されていて初めて黒子になる。と考え、社協の姿や役割を広く広報するために検討し、CATV 番組の放送を始めた。また、広報のあり方や SNS 等の広報媒体を活用するため、「広報・啓発活動 事業計画」の策定やすべての部署を巻き込んだ「広報委員会」を設置した。このことにより、広報活動は担当係だけが行うのではなく、社協職員全体の活動であることを共通認識とした。

(3)「毎年やることは一緒だな、助け合いの活動はやらんのかい？」

係長に就任した年に、会長からこの一言を言われた。これまでのサロン活動を中心にした地域福祉推進事業を変更し、「あったかご近所ネット（助け合い活動）」と「あそび場発掘プロジェクト」のモデル事業の取組みを始めた。

3、地域福祉コーディネーターの設置 【記憶】

平成 26・27 年度に長野県社協が開催した「地域福祉研究会」に参加し、地域福祉コーディネーターの設置に関わる調査報告・提言を行う中で、改めてその専門性と重要性を再確認するとともに、地域共生社会の実現に向けた国の動きを理解した。

平成 28 年度に伊那市より生活支援体制整備事業を受託し、住民主体のサービス創設を含む新しい地域福祉活動の推進が始まった。その際、事業で求められている「生活支援コーディネーター」と、従来からの地域福祉活動の専門職である「福祉活動専門員」がほぼ同様の役割であったことから、福祉活動専門員の役割を拡大し、地域住民すべてを対象とし、地域の多様な支援をつなぐ「地域福祉コーディネーター」として配置した。

令和 4 年度からは、重層的支援体制整備事業が実施され、その中では「アウトリーチ等を通じた継続的支援事業」「地域づくり事業」等の担当となっている。

3、まとめ

過去、60 年近くにわたり形成されてきた地域福祉活動。市町村合併や人口減少、少子高齢化等の地域や住民の変化とともに、これまでを活かしつつも新しい取り組みに変えていく工夫が必要だと痛感している。地域住民の皆さんとともに、引きつぎ、工夫し、変えていく試みを連綿と続けていくことが地域福祉活動なのだと感じている。



お名前 山岸 征男

所属：前軽井沢町ボランティア
センター運営委員長
：軽井沢・花とみどりの仲間た
ち 代表

略歴 大手ゼネコン（東京）に38年間在籍。帰省後（株）ハルディンで花苗の営業統括マネージャーを12年。並行して、軽井沢町社協ボランティアセンターを拠点に、ボランティア、地域活動に関わり、現在に至る。
書籍等（アマゾンで発行）
「軽井沢・きき取り物語」 「新軽井沢の歩み」

ボランティア・市民活動振興の歴史 ～信州を耕す「団塊世代」の青春グラフィティ～

信州の地域福祉の源流として、公民館運動や農村医療の実践、保健師や保健指導員の活動があげられる。しかし、それらの伝統を現在のボランティア・NPO 活動につなげてきた、「団塊世代」の反骨精神と連帯力だった!?

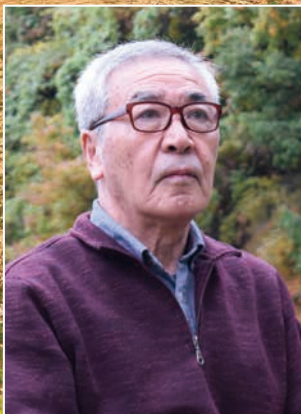
Interview

小池 正志さん

Masashi Koike

公益社団法人長野県社会福祉士会 前事務局長
社会福祉法人長野県社会福祉協議会 元事務局長

1949年長野市(旧中条村)生まれ。東京都主税局に勤務しながら大学を卒業。
1975年から、長野県社会福祉協議会の職員として「ボランティア活動の振興」や「市町村社協支援・地域福祉推進」を担当。
2004年から長野県社会福祉協議会 事務局長
2013年から長野県社会福祉士会 事務局長



1970年代

福祉ボランティアの振興が 社協の重点事業に

1976(昭和51)年、全国ボランティア活動振興センターが開所し、福祉ボランティアの振興が社協の重点事業となりました。全国の社協マンの集まる会議では常に、「福祉」だけじゃない、『世直し』の気概が必要だ」と熱く語る小池正志さんの迫力のある声がありました。

小池さんは、東京都庁の職員から長野市にUターン。たまたま長野県社会福祉総合センターに職を得ました。当初の業務は、プラネタリウムの解説員でした。1975年、所属法人の合併で図らずも長野県社協の職員になりました。ボランティア振興を担当することになりました。

福祉の経験も知識もありませんでしたが、持ち前の反骨心と学生運動を経験した団塊世代らしいネットワークの力で、その後の信州の地域福祉を牽引することになります。

「やる気世直し手弁当」で 信州を耕す

当時はボランティア^{イニシアチブ}Ⅱ奉仕活動のイメージが一般的でした。しかし、ボランティアの世界は福祉だけではないと、1977年、長野市社協の小林博明さんらとともに公開講座「新寺子屋塾」を開講。小池さんは、「高度経済成長期、つまり1950年代後半から1970年代に、公害により住民へ大きな被害が発生した。薬害や農薬被害の救済とともに公害のない地域社会が必要であり、改善の

ために草の根の行動していくのがボランティア!」と檄を飛ばしました。

社協という当時小さな任意団体に、「ボランティア」精神で新しい社会を作っていく「確たる使命を打ち立てました。

1976年、第1回長野県ボランティアリーダー研修会(現在の「長野県まちづくりボランティアフォーラム」)を開催。翌年には、県下4会場で開催されたボランティアワークショップを開催。長野市社会福祉協議会では、サマーチャレンジボランティア(現在の「サマーチャレ」)をスタートさせました。

1980年代

島崎潔氏と国際障害者年

温和な丸顔に大きな体で車いすを駆使し、障がい当事者団体のリーダーとして活躍していた島崎潔さん(故人)は、ボランティアリーダーとしても、豊かなつながりをつくり、様々なバリアと闘っていました。

当時は、障がいのある子どもたちは小学校から「隔離」され、大人になると施設で暮らすことが一般的でした。車いすですれ違う人たちの視線が束になって襲ってきました。そんな時代の中で、1981年、



小池さんと島崎潔さん(右)

国際障害者年が定められ、障がいのある人たちが書いた詩にボランティアが曲をつけて歌う「わたぼうしコンサート」が、奈良からさわやかな風を運んできました。



全国ボランティア研究集會・信濃路集會

1987年、第18回全国ボランティア研究集會が松本市をメインに県内8会場をつないで開催されました。全23分科会で福祉、環境、公害、平和など多様な分野で活動するボランティアが集い、交流しました。

この時、実行委員長を務めた鎌田實さんを

信濃路縦断わたぼうしコンサートは、島崎さんが実行委員長となり、小池さんは事務局長として支え、イベントを仕切りました。福祉イベントは無料が当然とされた時代に、チケットを1500円で販売し、県内8会場で約1万人を動員。これを機に県内各地のボランティアリーダーや社協職員間のつながりを深めていきました。

1981年に長野県ボランティア活動振興センター（現・まちづくりボランティアセンター）設置。長野県ボランティア活動振興基金の果実をボランティアセンター設置やボランティアグループの活動助成に活用しました。

（現諏訪中央病院名誉院長）は、長野県ボランティア活動振興センター運営委員長も務め、ボランティア・地域活動の推進にも尽力した立役者です。

長野県のボランティア・地域活動の盛り上がりが全国に響き渡りました。

急激な人口の高齢化に、市町村社協の仲間とともに格闘

長野県の高齢化率は、1985（昭和60）年に10%を超え、現在の32・3%まで一貫して上昇を続けました。高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けられるよう在宅福祉の充実が大きな課題となってきました。

介護保険制度施行前、在宅介護の負担は「嫁」の役割とされる傾向がありました。介護者の負担をみんなで共有しながら、地域の支え合いの仕組みをつくっていくため、市町村社協の基盤強化が不可欠でした。

市町村社協は、1983年に法制化され翌年には、福祉活動専門員を配置する国庫補助事業がスタートしました。市町村社協の社会福祉法人化を推進することが、県社協の重点事業となりました。

特に、全国で2番目に市町村数が多い長野県（当時121市町村、現在77市町村）でしたが、人口1000人以下の下伊那地域の村々を訪問して村長はじめ村の三役にプレゼンして歩くなどした結果、法人化率は、1989年（平成元年）に80%、2000年（平成12年）に99%となりました

戸惑いながらも「事業型社協」を推進

1989年、厚生省（当時）は「ゴールドプ

ランを策定し、翌年、福祉関係八法が改正され、高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けることができるよう、市町村を主体とした在宅福祉の推進が施策化されました。これによってホームヘルパーの増員、デイサービスの拡充などが一気に進みました。

地域課題は「福祉だけじゃない」と檄を飛ばしてきた小池さんは、戸惑いながらも、「世界に類のない急激な高齢化」に対応していくため、当時、全国社協が提唱した「事業型社協」の推進に取り組んでいきました。

1991年には厚生省の「ふれあいのまちづくり事業」がスタート。県単版の事業を含め、市町村社協にコーディネーターを配置して、ホームヘルパー等の公的サービスの充実と有償による地域の支え合い活動などの総合的な推進に取り組みました。

1990年代

「全国ボランティアフェスティバル」から「アートパラリンピック長野」へ

一方で、様々なイベントを通して、ボランティアと社協職員や行政職員が業務の枠を超えて協働活動を担い、ネットワークを広げ、人を育てる小池さんの持ち味は健在でした。

1995年には第4回全国ボランティアフェスティバル長野大会を開催。

1998年の長野五輪、パラリンピックと同時に、ボランティアとともに企画実施した、障がいのある人たちのアートをテーマとした非公式イベント「アートパラリンピック長野」を取り仕切り、「公式記録」にも足跡を残しました。

用された鈴木雅人さん（故人）は、イベントを契機に障がいの地域生活支援の仕組づくりに奔走。島崎さんとともに、「身体」「知的」「精神」と縦割りだった障がい者支援の包括化に現場からリーダーシップを発揮しました。

イベントでつながった人々の想いと力は、新しい世の中をつくる確かな原動力となりました。

2022年 大河へ

「イベント屋」と言われたこともありすが、「ネットワーカー」として、人と人をつなげて、「世直し」に貢献してきた自負があります。「団塊世代」を意識してきたことはありませんが、いわれてみれば、そこで培った反骨の精神と人と人をつなげる組織化の手法は、自分の原点と言えるのかもしれないと小池さんは振り返ります。

信州の地域福祉を作ってきた団塊世代のまさに「青春活躍劇」。その団塊世代が後期高齢者に至る2025年を控えて、改めて心に刻んだおきたいと思えます。

- ★1 長野県社会福祉総合センターは1972年に開所。「福祉推進の殿堂」としてライトアップされ、ロケットコーナーや県内初のプラネタリウムもあつた。県内の小学生は必ず「社会見学で訪問した」と言われる。小池さんは必ず「社会見学で訪問した」の解説員（自称「星の王子様」）だった。
 - ★2 当時は「KKコンビ」と言われていた。
 - ★3 小池さんは、長野県社協の事務局長等を務めた後、2009年度から再雇用で、広域圏を単位とした成年後見支援センター立ち上げに尽力。司法と福祉のつなぎ役としての役割を果たした。
- もう一つの顔は、1992年11月に長野県社会福祉士の立上げを取り仕切り、初代の副会長・事務局長。2013年度から9年間再度事務局長として社会福祉士の基盤強化に貢献。